

博士学位請求論文審査報告

2018年3月14日

申請者 ファヨル入江容子

論文題目 哲学の幼年期 - サラ・コフマン『オールドネル通り、ラバ通り』読解

審査委員 鵜飼哲 中井亜佐子 棚沢直子

1 本論文の構成

本論文はフランスの哲学者サラ・コフマン（1934-1994）の自伝的作品から出発し、哲学、歴史学、精神分析学、女性学、文学等、多方面にわたる検討を通じて、一人のユダヤ系女性哲学者の思想形成の原点となった経験の解明を主題とする学際的研究である。

本論文は以下の各章から構成される。

序

第1部 父の喪

- 第1章 サラの幼年期
- 第2章 父の不在が意味するもの
- 第3章 「赦しの不可能性」

第2部 母の喪

- 第1章 母との蜜月
 - 第1節 分離不安
 - 第2節 「封印」
- 第2章 2人の母との不可能な共生
 - 第1節 ラバ通り rue Labat-向こう側 Là-bas
 - 第2節 メメへの近親相関的同性愛と実母の嫉妬
 - 第3節 母 vs メメ
- 第3章 融合する二人の《母》と不在の《父》 - レオナルドとサラ

第4章 母のための喪の作業

第1節 《母》の暗い部屋あるいは悪夢

第2節 失われた「葉書」

第3節 「万年筆」あるいは「手前存在」Vorhandensein は語る

第4節 母の遺品

第5節 《父》と《母》の融合

第3部 メメの喪

第1章 メメあるいは「諸国民の正義の人」－「自伝」と「救助談」の差異

第2章 メメへの感謝

第3章 メメの神秘化－サラの贈与

第4章 メメの脱神秘化－アナンケーとしての「女性性」の受け入れ

第5章 「赦しの不可能性」と「笑い」

結語

補論 「不安と《笑い》によるカタルシス－クラインとヒッチコック」

参考資料 『オールドネル通り、ラバ通り』草稿調査資料

参考文献

2 本論文の概要

本論文の目的は、20世紀フランスの女性哲学者サラ・コフマン (Kofman, Sarah: 1934-1994) の自伝『オールドネル通り、ラバ通り』 (*Rue Ordener, rue Labat*, 1994) の読解を通じて、その幼年期の経験が、いかに彼女の哲学的営為を基礎づけていたのかを明らかにすることである。著者はそのためにフランスのカーンにある「現代出版記憶研究所」 (Institut mémoire de l'édition contemporaine 略称 IMEC) において当該書の草稿を調査し刊行された版との比較対照作業を行った。

著者はサラ・コフマンの哲学的営為の原点を彼女の幼年期の経験に求める。コフマンは正統派ユダヤ教の一派であるハシディズムを信奉するラビを父として持ち、厳格な戒律に則った幼少期を送った。しかし彼女が8歳の1942年7月16日、ドイツ占領下のパリで、ヴェルドローム・ディヴェール大量検挙事件 (Rafle du Vélodrome d'Hiver) の際、父は警察に連行され、アウシュヴィッツ強制収容所に移送された。コフマン自身も母とともに身を隠さなければならず、その過程でメメ (mémé) と呼び慕うことになるカトリックのフランス人女性に匿われた。こうして父の不在、ユダヤ教文化とカトリック文化のそれぞれを体現するかのよう二人の「母」との間で葛藤が生じた。コフマンはこの苛酷な幼年期の経験を横断して、それでもなお「自分自身」として生き続けること、生を肯定することを選び、読み続け、書き続ける哲学者となった。1994年10月15日、彼女は自ら命を絶つ。その結果この著作は、コフマンが生前に自らの意志で出版し

た最後の書物となった。

当該書の冒頭には次のように記されている。「彼[父]から私に残されたものは一本の万年筆だけだ。[...] 私がそれを捨てよう決心する前に私のほうが早々と「見捨てられた」のだが、その後も私はずっと手放せないでいる。スコッチ・テープで応急処置をされたままの姿で、それは今も私の目の前の仕事机の上にあって、私に「書け、書け」と強いてくる。私がこれまでに書いてきた多くの本は、<それ> ça を物語るために、横断してこなければならなかった道だったのかもしれない。」

父、母、メメの3人の「死」を物語ることで、冒頭の一節で「それ」と名指されたものを、コフマンはある仕方で語ろうとした。著者は「喪の作業」という精神分析概念に依拠しつつ、コフマンの幼年期の経験が、どのように彼女の後年の哲学的営為を基礎づけることになったのかを検討していく。

第1部「父の喪」では、著者は父ベレクが検挙された場面のコフマンの草稿における描写と公表されたテキストを比較し、両者の間になぜ3つの修正が行われたのかを検討する。

第一に、父が連行された場面で草稿では「絶対的に悲劇的な絶望の場面」と形容された一節をコフマンは修正している。それは「ユダヤ的」な形容である「絶対的なもの」と「ギリシア的」な形容である「悲劇的なもの」が両立しないと考えたためだと著者は解釈する。というのも、「悲劇的」という形容は、アウシュヴィッツでの父の「死」を、アリストテレス的なカタルシスと化してしまうおそれがあるからである。

第二に、「神々に見捨てられた」という草稿の表現が、公表されたテキストでは「父に見捨てられた」と修正されている。これはコフマンにとっての「絶対的なもの」が、「ギリシア的」な複数形の神々ではなく、「不在の《父》」であったからだと解釈される。この点を著者は、人づてに知ることになった父の最期の経緯と結びつける。ユダヤ教の戒律に忠実に安息日に労働することを拒否したために彼は殺された。休息が許されない収容所では「労働」は「死」にほかならず、この論理に抗して生を肯定したために父は命を落としたのである。ここで著者はモーリス・ブランショの所説を援用し、コフマンの父がその不在によって露わにした「無限の関係」を示唆するためにこの修正が行われたと解釈する。

第三に、草稿には存在する聖書の詩編137の一節の引用が公表されたテキストでは削除されている。「赦し」は「不可能なものそのものとして自らを告げざるをえない」というジャック・デリダの言葉を手がかりに、著者はコフマンが詩編の引用を削除したのはそこに含まれる「復讐」の観念を否定するためであり、この削除によって彼女は、復讐の断念と「赦しの不可能性」をともに無言のまま告白したのだと解釈する。

第2部「母の喪」では、コフマンが一見冷淡な姿勢を見せている実母の死に際して、「喪の作業」がなされているかどうかを検討される。

『オールドネル通り、ラバ通り』の中で唯一実母の死に触れられているのは、「母が亡くなったとき、この葉書を探したが見つからなかった。何度も繰り返し読んだものであったし、今度は私が持っていたと思ったのだ」という一文のみである。この葉書は父が連行されたのちパリ郊外のドランシー—一時収容所から母に送ったものであり、それを娘は「父の最後の生の証」として所持したいと思い、母の死の際に母のハンドバッグの中

に探したのである。しかし彼女はそれが紛失していることに気づく。そして、「あたかも、もう一度、あらためて父を失ったようだった」(ibid.)とを感じる。

先行研究ではこの場面でコフマンは母に父の痕跡を探しているのだという解釈、また、ここでコフマンはもうひとつの「父の遺品」である「万年筆」を忘却しているのではないかという解釈もある。しかし著者は、これらの解釈を批判的に吟味し、「万年筆」と「葉書」は同じ意味で「父の遺品」とはみなされえないと考える。前者は母の生前に母のハンドバッグから盗み出したものであるのに対し、失われた「葉書」は母の死後にハンドバッグの中に探した限りで「母の遺品」なのである。したがって、「もう一度、あらためて父を失ったようだった」と表現された喪失感は、父の痕跡をそのなかに探していた「母の身体」を失った喪失の悲しみであると解釈される。父の不在の現前の表象である「万年筆」、あるいはそれがその象徴である父からの「書け、書け」という命令はいまや母からの命令でもあるかもしれないのであり、父と母はかくして融合し「喪の作業」は二重化する。以上の分析の結論として著者は、コフマンが父の「喪の作業」をしているつもりで、実は母の「喪の作業」をしている可能性を示唆するのである。

第3部「メメの喪」では、フランス人の保護者であり幼いサラの愛着の対象となったメメの死に触れた、『オールドネル通り、ラバ通り』の最後の一節が検討される。この結語には、「彼女は最近サーブルの養護施設で亡くなった。[...] 私は彼女の葬儀には行けなかった。しかし、神父が彼女の墓に手向けた言葉は知っている。この人は戦争の続く間、ユダヤの小さな女の子を救った人であった」と記されている。

この一節は、先行研究では、メメというもうひとりの「母」に対しても、その死に際してコフマンが驚くべき無関心を示している徴候と解釈されてきた。しかし著者は、ヤド・ヴァシエム「世界ホロコースト記憶センター」の、迫害の日々にユダヤ人を助けた非ユダヤ人を顕彰する「諸国民の正義の人」のリストに、1987年にコフマンがメメをノミネートした際の「証言」を参照し、『オールドネル通り、ラバ通り』の内容とのあいだに顕著な矛盾が存在することを指摘する。そしてその理由を探ることを通して、サラのメメに対する「喪の作業」の内実を検討する。

第一に、コフマンがメメを「諸国民の正義の人」にノミネートすることによって神秘化した行為は「女性性の拒否」として解釈される。「女性性の拒否」は、コフマンの定義によれば、男性の願望に属する欲望であり、本来は息子の願望、深く愛しすぎた母に「ペニス」を、すなわちその欠如を隠すヴェールを贈りたいという願望である。著者はコフマンが、あたかも男の子が愛する母に「ペニス」や「大便」をプレゼントするかのようになり、「諸国民の正義の人」の栄誉をメメに贈ったのだと解釈する。

第二に、コフマンは、『オールドネル通り、ラバ通り』において、メメが「完璧な良い母」というわけではなかったことを、彼女の反ユダヤ主義的偏見を暴くことで示している。これは脱神秘化の操作であり、それを著者は、コフマン自身が、哲学者として、「女性性」を、すなわち、コフマンの定義によれば「アナンケー」(必然性)あるいは「良くも悪くもある自然=《母》」を受け入れる必要があったためであると解釈する。このために一見、コフマンはメメを「捨てた」ようにみえるのである。

最後に著者は、1993年～1994年に執筆したことが確実とみられる『オールドネル通り、ラバ通り』の末尾で、1987年のメメの死を「最近」と述べていることを問題にする。

1987年は父の死が語られた『窒息した言葉』の出版年であるが、この日付の変更によりメメの死はコフマンの父および実母の死と融合し、そこから新たな「喪の作業」が再開されることになる」と著者は考える。

またこの日付の変更は、著者によれば、『オールドネル通り、ラバ通り』に秘められた「笑い」につながるものでもある。この「笑い」は読者を、『窒息する言葉』へと導く。この後者の著作の冒頭はさらに、その前年に書かれたもうひとつの著作、『人はなぜ笑うのか』というフロイトの『機知』を論じた著作の末尾につながっていく。そこではヨム・キップール（大贖罪の日）に遭遇した仲の悪い二人のユダヤ人のあいだで交わされたと思われる「機知」が問題となるが、そこでは互いに赦し合うことの不可能性が示され、それが「笑い」を引き起こすのである。この「笑い」にはいかなる抑圧もない「赦し」の物語の端緒が示されている」と著者は考える。

以上の考察から著者は、コフマンが自伝の冒頭で生涯の哲学的営為がすべて「それ」を語るためにあったと述べた「それ」とは、「書くこと」への衝迫を引き起こす幼年期の欲動の蠢きであると結論する。それはファシズムの時代に、自らの命の危険を顧みず、それぞれの仕方でも子どもの命を救った3人の大人に対する「喪の作業」を、コフマンは哲学的営為として遂行したということの意味する。自伝的テキストに隠された「笑い」は、もはやコフマンによっては語られえなかった、ある「赦し」の物語に向かって開かれていることを示唆して本論文は閉じられる。

補論「不安と《笑い》によるカタルシス ― クラインとヒッチコック」では、『オールドネル通り、ラバ通り』の19章で言及されているヒッチコックの映画作品『女が消える』が、コフマンの没後に公表された「不安とカタルシス―あるいはいかにして不安は生まれ、そして消えるのか（アルフレッド・ヒッチコック『女が消える』について）」という評論と対照しつつ論じられる。ここでは二人の「母」の代替、取り違えから生まれる不安が、メラニー・クラインの対象関係論を参照しつつ分析される。そしてコフマンが繰り返し見たと告白するこの作品が、弱い父の介入によってもたらされる、アリストテレス的ではない、もうひとつのカタルシスを引き起こしうる「笑い」を含んでいることが確認される。

3 本論文の成果と問題点

本論文の成果としては以下の点が挙げられる。

第一に、哲学者の自伝という例外的なジャンルに着目し、ドイツ占領下のフランスで迫害を受けたポーランド系ユダヤ人の少女が「哲学者」になる過程の起源に位置する苛酷かつ複雑な経験の諸相を仔細に分析することによって、アウシュヴィッツで殺された父が体現していたヘブライズムから、どのようにして娘が、ヘレニズム＝「哲学」への道を踏み出したのかを解明したことである。

第二に、哲学者の自伝の研究を文学研究や歴史研究と接続可能な学際的展望のもとで遂行したことである。自伝をたんなる作者についての伝記的事実の情報源と捉えるのではなく、現代出版記憶研究所における緻密な草稿調査、ヤド・ヴァシエム「世界ホロコ

ースト記憶センター」およびショアー記念館のアーカイブの周到な探索、さらにはパリでの現地調査を踏まえ、作者による誤記や削除された部分にむしろ注目して「作者の意図」に逆らった見事な分析が行われている。比較的短いコフマン晩年の自伝的テキストの読解を中心に据えつつ、彼女の思想の軌跡の概略や他の思想家との関係も同時にたどる論の展開になっていることも特筆にあたいする。この論文をベースにして、女性思想史、自伝研究など、さまざまな方向に今後の研究を発展させていくことが可能であろう。

第三に、一人の父と二人の母の「喪の作業」の分析という構成を持つ本論文は、精神分析的探求としての性格を兼ね備えており、単独的な経験から普遍的な射程を持つ考察が引き出されていく論証の過程は非常にスリリングであり、読者の無意識にもインパクトを及ぼす点で、学術論文の一般的次元を超えたある種の作品性が認められる。

とは言え、本論文にはいくつか不十分な点も認められる。

第一に、論の展開の全体にわたってやや繰り返しが多く、論旨から外れた自問自答の傾向が散見される。断定すべきでないところでの断定、断定すべきところでの曖昧さが、議論の流れを追うことを困難に感じさせる場合も少なくない。さまざまな分析の結果を突き合わせ、考察のレベルをひとつ上げて総合的に解釈することによって、より明確な結論を引き出す必要がある。

第二に、自伝的テキストの読解に当たって草稿やアーカイブを丹念に調べたことは賞賛にあたいするが、その後でもう一度テキストに立ち戻り、著者による自己表象の提示という水準でさらに考察を深めるべきである。哲学者による娘の立場からの父と二人の母に対する三重の喪の作業の内実についても、そのことによっていっそう精密な分析が可能になるだろう。

第三に、説明不足の文章、誤字脱字の多さ、フランス語論文の文体からの直訳的な一人称複数形の多用など、文体上の問題及び論文の形式的な完成度の点でもう一段努力が求められる。

とはいえこれらの問題点は今後の研究の発展のために指摘しなければならないものであり、本論文がきわめて貴重な研究であり、著者の今後の活躍をおおいに期待させる確かな成果であることを否定するものではない。

以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えている。

最終試験結果要旨

2018年 3月14日

受験者 ファヨル入江容子

最終試験委員 鵜飼哲 中井亜佐子 棚沢直子

2018年3月3日、学位請求論文提出者 ファヨル入江容子氏の論文および関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文「哲学の幼年期 - サラ・コフマン『オールドネル通り、ラバ通り』読解」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、ファヨル入江容子氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、ファヨル入江容子氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。